

## 【地域情報】

## 戦時の奥武蔵観光

加藤寛之\*

キーワード：太平洋戦争、奥武蔵、観光、旅行、ハイキング

## 1. はじめに

昭和10年代は日中戦争を含む太平洋戦争の時期であるとともに、ハイキング需要が高まった時でもある。戦争遂行のなかでも高いハイキング需要が続いており、この人気は戦況が旅行での鉄道利用を完全に停止させる状況となる太平洋戦争終盤まで続いた。

本稿は、ハイキングを中心とした奥武蔵の観光について、太平洋戦争中、特に対米開戦後についての著述や資料を収録して、それに説明を加えて自由な考察のためのヒントとすることを目的としている。整理した論述にしない理由は「12. どうとらえるのか」に記した。奥武蔵観光の太平洋戦争中の状況をまとめた著述は目にすることがないので、本稿がそれを探求されたい方の参考になれば幸いである。

なお、太平洋戦争中の社会状況と観光との関係を扱った論述や地域の調査事例はいくつかの先例があって、それらは奥武蔵の事例を考察する際の参考になる。本稿の参考にしたものを「13. 関連著作等と地域の調査事例」として末尾に挙げておく。

本稿は、形式にとらわれ展開がしばられないように、読みものとして記述している。時期的には日中戦争に始まり対米開戦後から終戦、地理的な範囲は現飯能市で主に吾野地区周辺と大雑把にとらえているが、出典の詳細情報や年号表記の統一、用語の定義などにこだわっていないこともご容赦いただきたい。戦前出版物からの引用の際は、文字の一部を新字や現代表記にしてある。画像は末尾にまとめ、比較しやすくした。

## 2. 昭和17年頃のハイキングに対する庶民感覚

逗子八郎「山野逍遙について」『武蔵野随筆』（文林堂双魚房、昭和17年）に、ハイキングと時代の要請との関係を説明した文章があるので抜粋する。昭和17年発行にもかかわらず、ここでは、ハイキングは自己の健康、体力の増進または情操の涵養を目指すものであって、安上がりで健康的と擁護している。そしてそれは国家目的に役立つために練成され、そのようにならねばならないとしているから、つまりハイキングは国の指針にもあう私的行為だと言っているようなものだ。時代背景には個人旅行の制限や鉄道輸送の逼迫があるのだが、個人ではまずいが集団旅行ならばよく、混雑していない

\* 元城西大学広報課課長

鉄道支線等ならば鉄道にとっても望ましい、としている。国家レベルの必要とは異なり、幹線でない鉄道を利用したハイキングを擁護し推奨する立場である。

「一口に、登山と健歩（所謂ハイキング）とは、併称され、同じやうに取扱はれる事が多いのであるが、少し立ち入って考へる、この二つは、根本的に異なる要素をもっている事に気づく。健歩乃至山野の逍遥といふようなものは、主として自己の健康、体力の増進または情操の涵養といふことを目指して行はれ、いはば厚生に出発しているが」「登山は、厚生を目的とする所謂体育運動といふやうなものよりも、寧ろ、武道に近い。何となれば、体育運動は自己の生命を充養しようとするものであるに対し、武道は、自己の生命を脅かす不義不正のものあらば」「単に厚生といふやうな観点からいっても、健康運動が国民運動として取上げられてゐる今日、国民の健康を維持し、進んでその体力を増強するに就いて、道具も要らず、金もかからず特別の設備も亦必要としない健歩・山野逍遥程秀れたものはないといつてよい。」「この二三年來、国鉄、私鉄を通じ、激増の一途を辿る貨客のための輸送力は著しく窮屈になってきているから、無駄な旅行を慎むべきことは、国策輸送に協力する立場からも当然であるが、厚生のための、健全な意図をもつた山野逍遥や特に練成のための、真に祖国認識のための集団旅行ならば、行なはれてよい事は勿論であつて特に、それが国鉄私鉄を通じ、混雑しない支線等にコースを求めることは、今は鉄道にとっても望ましい事だらうと思ふ。」「この意味から、例えば東京を中心とした場合、さう大して遠出をせず、都心より乗車一時間乃至二時間位の半径を以つて包摂せらるる處の所謂武蔵野に、自然の幽趣を探るなど、此上なき心身の充養といはねばならない。」「ただ問題は、かくの如く充養された個人の精神と健康と情操が、単に個人のものとして留まらぬといふことである。今やすべて個人の力は国家目的に役立つために練成され、且そのやうに綜合集結されなければならない。』

登山に対する主張はさておき、ここで重要なことは「健歩・山野逍遥程秀れたものはない」、つまりハイキングは体力を増強すると擁護していることである。「例えば東京を中心とした場合、さう大して遠出をせず、都心より乗車一時間乃至二時間位の半径を以つて包摂せらるる處の所謂武蔵野に、自然の幽趣を探るなど、此上なき心身の充養といはねばならない」との主張は、もはや武蔵野へのハイキング勧誘である。しかも同書には逗子八郎本人による「奥武蔵に就いて」も収録されているのだ。

なお、このころには「徒歩旅行」という範疇もあった。『徒歩旅行』第5巻40号（昭和17年6月1日発行、日本徒歩旅行社）の森本次男「徒歩旅行に就いて」によれば、「徒歩旅行と云うことは山野を歩くことである。」「我国に於いては一般に、登山と遊山（ピクニック）の中間的なものの様に考へられて居る」とある。このタイトルの雑誌があることそのことがハイキング人気を証明している。以下では、登山、徒歩旅行、ハイキングといった区別は論旨と関係が薄いので、拘らないことにする。

### 3. 国策を都合よく解釈する庶民感覚

さらに積極的な国策理解を述べた例が、『徒歩旅行』第5巻40号の碓井貫一「巻頭言」にある。該

当部分を転載する。

「この戦時下に当り厚生、文部両省は「先ず歩け」の標語に依り健康保持に登山やハイキングを勧め以って愈々頑強なる身体の養成に努めつつあるは吾等の最も喜ばしき次第である、この意味に於て夏はキャンプ生活もよろし冬のスキーもよろしく、将た其他凡ての運動競技をも此の際加速度にすすめ度いのである、畢竟するところ我皇軍の破竹の勢いも平素登山の訓練よろしきを得た結果であって敢て怪むるに足りない。」

もはや論旨の捻じ曲げに思える。当該誌の巻頭広告は体位向上各種運動用品をうたう日本屋運道具店で、誌面には「戦ひ抜くぞ大東亜戦」「体育に足並揃へ総進軍」とある。これもスポーツと国策が共存している。『徒歩旅行』第5巻39号（昭和17年5月1日発行、日本徒歩旅行社）の巻末広告には武蔵野電車と秩父電車が対向掲載しており、戦時下であることを感じさせない。当該誌には両鉄道会社だけでなく他の鉄道会社、遊園地、観光バス、温泉旅館、駅弁屋など、旅の関連広告は多彩である。なお、〇〇電車と名乗ることは、動力が汽車でなく電車運行であることを顕示するための広告表現。

（本稿末尾 図3.1『徒歩旅行』5巻39号表3と対向頁の広告 参照）

#### 4. 武蔵野鉄道の輸送実績

太平洋戦争中は、旅行熱が高く、戦争遂行の観点から国が旅行の自粛を要請するほどだった。このことは、白幡洋三郎『旅行ノススメ』（中公新書1305、1996年）や上田卓彌「戦時下における旅行制限とガイドブックについて」（『星稜論苑』第41号、2013年）が詳しい。

武蔵野鉄道（現：西武鉄道）の貨物量や旅客数等は、飯能市郷土館『西武池袋線飯能池袋間開通100周年記念 特別展 武蔵野鉄道開通』（飯能市郷土館、平成27年）に、武蔵野鉄道の営業報告書から作成したグラフがある。これで昭和10年ころから貨物量や旅客数等が急増していることが分かる。当該営業報告書は飯能市博物館がデータ所蔵している。

旅客について本文に以下の説明がある。

「武蔵野鉄道の営業報告書に、初めて「ハイキング」の言葉が登場するのは、昭和9（1934）年上期（第45回営業報告）のことで、」「これ以後、ハイキングコースを積極的に設定し、昭和11年には正丸峠ドライブウエーも開通し、昭和13年には正丸峠に宿泊施設である厚生道場を設置するなどの営業努力を行っている。昭和12年の日中戦争の勃発以後も国民の「銃後保健」の自覚によりハイキング客は増加を続け、昭和13年には厚生省、鉄道省、東京市観光課とともにハイキング奨励のPRをするなどし、同年にはハイキング熱の勃興とハイカーの未曾有の激増が報告されている。実際旅客収入、旅客数とも急激な増加を示している。ただし、昭和16年以降の異常な旅客数の増大（昭和20年は昭和15年と比較すると収入で2.8倍、旅客数で2.3倍）はそれだけが原因であったのかは不明である。夏季に奥武蔵キャンプ村、冬季にスキー場が設置されたのもこうした時期であった。」

貨物について本文に以下の説明がある。

「昭和12（1937）年には日中戦争が始まったが、戦争の遂行に不可欠でかつ輸入に頼っているガソリンの使用が制限されるようになると、貨物自動車の輸送が鉄道に振り替えられるようになっていった。昭和13年頃から収入、輸送量ともに大きく伸び始め、昭和19年には昭和13年と比較すると収入で2.1倍、貨物量で1.6倍に増加する。」

## 5. 武蔵野鉄道の天覧山駅開業と休止

「天覧山」駅は、武蔵野鉄道が「東飯能」駅と「高麗」駅の間、天覧山の東方に設けた駅。開業時の「東飯能」駅は市街地から遠い畑の中にある駅だったので、「天覧山」駅は八高線開業にともなう「東飯能」駅利用者の利便性を考えた観光客用の駅だと考えられる。駅は線路の天覧山側にホーム1本と駅舎があり、売店もあった。飯能市史編纂の資料である『八高線・武蔵野鉄道資料』（飯能市立図書館蔵）によれば、使用開始は昭和6年4月1日で昭和20年2月3日使用を休止（廃止は昭和29年10月10日）。飯能市街地の住民は「飯能」駅の使用が便利であり、「天覧山」駅は観光用以外の用途に乏しい。さすがに観光需要がなくなり不要不急の目的のための駅でもあることから使用休止したのだろうが、それでも昭和20年2月3日まで使用している。

## 6. 逼迫する輸送力と観光の自粛要請

「埼玉新聞」昭和18年12月17日 に、「不急の旅行や小荷物託送の自粛 翼賛県支部で実践事項決定」の記事がある。「年末年始の生活態度」の「自粛運動」として8項目をあげ、その八に

「八、年末年始の輸送に協力

イ、遊樂旅行はもとより不急旅行は一切やめること

ロ、贈答、買出その他の不急の荷物託送もやめること」

とある。「遊樂旅行はもとより不急旅行」が自粛を呼びかけるほどに行なわれていたことが分かる。だが、これで旅行は止まらない。「埼玉新聞」昭和19年3月30日 に、「必勝輸送力増強期し 旅行の自粛徹底化へ 全県民の卒先協力方を要望」「“決戦だ” この一年は 断然旅行を止めよ」がある。大政翼賛会中央本部と協力し「戦力増強並に防空疎開に必要な輸送を強化するため」「旅行の自粛徹底」「旅行の徹底的制限」を採択し、概ね100kmを超える遠距離旅行を制限している。この時点でも、自粛を強く要請するほどに遠距離旅行が行なわれていたのだ。その5か月後、「埼玉新聞」昭和19年8月14日 に「遠距離旅客を制限 買出部隊の自粛要望」がある。「本当にお墓詣りだけだらうかと疑いたくなる」遠距離旅客があり「殊にかうした連中の防空服装は全然念頭に入れてないかの如く観られる」状況だった。「旅行の自粛自戒を徹底的滲透」を要請するほど旅行熱は冷めていなかった。



この時点での強い制限は100kmを超える遠距離旅客であり、近距離は駅での発券枚数制限だった。

## 7. 武蔵野鉄道による厚生道場の建設

「厚生道場」は、ハイキング者向けに武蔵野鉄道が正丸峠に近い場所へ開設した休憩宿泊施設。戦後に改称し「ガーデンハウス」となったが「正丸峠」を冠して「正丸峠ガーデンハウス」と称することが普通。当該施設の呼称であるとともに、バンガローも併設された施設全体の呼称でもある。

この施設は昭和11年「正丸売店」の開業がその始まりで、同年11月15日の県道川越－秩父線の開通に合わせたものであろう。開通と同時に武蔵野鉄道によるバス運行が始まっている。武蔵野鉄道は武蔵野を探る会会報『むさしあぶみ』第27号（昭和11年12月1日）で「東京の人は、男でも、女でも老人でも、子供でも苦もなく頂上まで行ける」と紹介している。

「厚生道場」の名がある中心施設の竣工は昭和13年11月。藁葺の日本家屋で、奥武蔵ファンの宿泊所であり、豪華な山小屋だった。『徒歩旅行』第5巻38号（昭和17年4月1日発行、日本徒歩旅行社）の加藤一男「奥武蔵の山々（一）」に「厚生道場」について言及があり、「春と云っても山の早春はまだ寒い。冷い風にかじかんだ手を焙る為に道場の中に飛び込む事にしやう処道場は出来上つてから日の浅い実に其名に恥じない理想的な山小屋である囲炉裏を囲んで昼食を済ませたら」と上質な施設であることを記している。飯能地区の地元紙「文化新聞」昭和29年9月9日によれば、呼称は「真面目な名称をつけないと連れ込み宿のように誤解」されるので「厚生省が発足したのにちなんだ厚生道場と云う至って野暮臭い名称をつけた」のだという。

厚生道場は、坂倉登喜子『奥武蔵』登山地図帳23（山と溪谷社、昭和23年）に「戦後再び復活して」「戦後再び山の根拠地としてハイカーを迎える様になった」とあるので、太平洋戦争中のある期間に休業していたことがわかるが、休業時期は判然としない。なお坂倉登喜子『奥武蔵』には「厚生道場」に「ロック・ガーデン・ハウス」のルビがふられたところがある。戦後の進駐軍対応の呼称であろうか。これが「正丸峠ガーデンハウス」の呼称につながったのだろう。

（本稿末尾 図7.1『むさしあぶみ』第27号 参照）

## 8. ハイキングの勧誘を続ける武蔵野鉄道

武蔵野鉄道が太平洋戦争中も継続してハイキングの勧誘をしていることは、パンフレットで確認できる。

図8.1・図8.2は同一物の内外面。「厚生道場」とあるので、昭和13年11月以降の製作である。表紙に日の丸掲揚と皇居遥拝の方向を示す写真と、内面に質素な装いの女性の写真を使っているのだが、それ以外の写真は上品な装いでハイキングを楽しむ人たちであり、文章もハイキング情報のみである。つまり、戦時という世相を現しているのは写真2点のみである。

日の丸掲揚と皇居遥拝は、『徒歩旅行』第5巻39号の植松 威「五月の日光」にも山小屋の朝の行事で紹介されている。皇軍の武運長久と戦歿将士の英霊に感謝の祈念とあり、当該パンフレット写真もそれであろう。

このころ、今日でいう山ガールは、険しい山を含めて普通の存在になっていた。女性登山者については、『徒歩旅行』第5巻39号の吉野利三「健母養成と山 集団登山が最適」に次がある。

「近年は山に対する女性の憧れが著しく増してどこの山へ行っても必ず女性の登山者を見受けるやうになりました。」

図8.3・図8.4は同一物の内外面。「厚生道場」とあるので、これも昭和13年11月以降の製作である。表紙写真からうける印象では、図8.1・図8.2以前の製作にみえるが、図8.3・図8.4が後のようだ。「厚生道場」の宿泊料金はともに1泊50銭で同額だが、図8.4には新館が加わっている。交通のハイキング割引「正丸峠ドライブウエー」は図8.1が1円94銭で、図8.4が2円50銭であって、値上げしている。表紙の背景写真には上品な装いでハイキングを楽しむ人たちを使っているが、内面の文は「心身鍛錬」「志操涵養、心身鍛錬への境地へ進む可きではないでせうか、銃後の備へとして体位向上の強調される今日純良なる節操と、規律の下に質実強健なる気風を養ひ三千年の歴史を誇る光輝ある国土を認識してこそ、ハイキング本来の意義を発揚し得るものでありませう」と国策にそった文がある。国策に沿ったその文は昭和17年発行の逗子八郎「山野逍遥について」の論調と同じである。ただしその前後の文は行楽としてのハイキングへ誘うものである。

図8.5は、キャンプ村を増設していると分かるので、図8.3・図8.4よりもさらに後の製作であろう。表紙に色文字で目立つように「体位向上」「心身鍛錬」と入っている。図8.5の内面には、図8.1にある日の丸掲揚と皇居遥拝の方向を示す写真も使われている。

これら図8.1～図8.5の3点のパンフレットから、新館とかキャンプ村といった施設の充実が続いており、太平洋戦争中もハイキング需要が高まり続けたことが読み取れる。一方でパンフレットでの国策に対する配慮には、自由裁量の幅があったらしいと推定できる。ハイキング勧誘の機能はそのままに、国策に沿った配慮を写真や文字で施した、ということではないか。

問題は輸送力である。パンフレット図8.6・図8.7（同一物の表裏面）は縦90mm・横65mmほどの小さな1枚ものの単色刷りで、製作時期は分からない。これには、バス便について「ガソリン規正ヲ強化」で運転便数減らしたが、「日曜祭日ハ正丸峠方面旅客輸送ノタメ他線ノバス運転回数ヲ減ジ之ニ充当」し、「子ノ神戸山頂…区間ハ御婦人御子様方ニ譲リ」などとある。つまり、バス便確保に努力を要するほど日曜祭日の人出は多く、家族連れハイキングもある、ということだ。バスを運行する武蔵野鉄道は、ガソリン規正が強化される中でもハイキング人気に応じた輸送力確保に努力していたのだ。

これを補強する記述が、『徒歩旅行』第5巻39号の加藤一男「奥武蔵の山々（二）」にある。

「吾野駅で武蔵野電車から下車すると駅前から正丸峠へ行くバスが、それが日曜日でもあろうものならハイカーを満載して左の方へ広い道に砂塵を挙げて走って行く。」

一方、そのバスの運転間隔は長くなっていたようで、『徒歩旅行』第5巻40号の加藤一男「奥武蔵の山々（三）」には以下のような記述がある。

「吾野駅で電車を降りたなら駅前から秩父行のバスに乗ると良い。バスは峠を越えて秩父へ出る  
のであるが、近頃は運転間隔も大分長くなったので、悪くすると駅前でかなりの間バスを待たね  
ばならぬことは予め予定に入れて置かぬと、…」

バスは減便されていたが、休日はハイキング客が押し寄せていたのだ。

(本稿末尾 図8.1・図8.2・図8.3・図8.4・図8.5・図8.6・図8.7 参照)

## 9. 子ノ権現のおもてなし

ハイキングで食べものは重要であるが、戦時ゆえに持ち物として整えることが難しくなっていた。  
『徒歩旅行』第5巻39号の小笠原勇八「夏山の指導 雪渓滑りの要領」にある「戦時登山の食料」の  
項に次の文がある。

「いまや食料の整備の中々困難な時代になって」「勿論パンだ、ソーセージ、コンビーフだのや  
れバターチーズなどと手に入ればいいのだが、さうは中々行きさうにもない、大体米だって二合  
三勺やそこらでは山中一日の食料には不足である。まして幅食物や嗜好品など、どれだけでも手に  
入らないと思ふ。」

食料として並んだ品名をみると、上等な暮らしぶりを感じさせる。ハイキング客は、そういった物  
品が入手できる地域の、生活に余裕がある人たちであったということかもしれない。

さて、何を食べるのかとなれば、特にその場所でしか口にできない食事には魅力がある。吾野地区  
にある子ノ権現は、とんでもない大盛りの米飯を供する高盛飯という食事を提供していた。高盛飯に  
ついては、坂倉登喜子『奥武蔵』（登山地図帳23、山と溪谷社、昭和23年）に「高盛昼食券付コース  
として賑わったところだけに」とあって、参拝の信者云々でなく観光客向けであったことが明白。同  
書に「高盛飯」は「戦争中より休止」したとあるのだが、昭和17年4月1日発行の『徒歩旅行』第5  
巻38号の加藤一男「奥武蔵の山々（一）」に「お高盛りで有名である」とあり、昭和17年6月1日発  
行の『徒歩旅行』第5巻40号の編集局「東京市民健康路（六）」にも「此処の「お高盛り」御飯は相  
当の豪傑でないと喰べ切れない」とあるから、この時点では提供していたことが分かる。子ノ権現で  
楽しめる高盛昼食券付コースが武蔵野鉄道とのタイアップ商品であり、その利用クーポンをJTBの  
前身である「ツーリストビューロー」、つまり国レベルの観光案内所で販売し勧誘していたことが武  
蔵野電車による子ノ権現のパンフレット図9.1で分かる。

(本稿末尾 図9.1子ノ権現高盛飯とクーポン式遊覧券 参照)

## 10. 東京市が鳶平市民野営場を建設

武蔵野鉄道だけでなく、東京市もハイキング需要に応える施設を建設した。

昭和14年、飯能市大河原地区に東京市の「鳶平市民野営場」が開設された。「鳶平市民野営場と附近の市民健康路の葉」（東京市市民局体力課）によれば「東京市市民局体力課に於て市民の心身鍛錬道場として開設」とあるが、施設には「家族村」「婦人村」があり、実態はハイキング者向けの宿泊施設と推定される。『おおかわら今昔』（朝日会、昭和52年）の記事と同葉の本文から、この葉の製作は昭和15年と推定できる。

『おおかわら今昔』によれば、「終戦と同時に廃止となった」という。また、赤田喜美男編『ぼくの軍国少年記』（1994年）では「鳶平の噂もあまり聞かれることなく、それから間もなく、戦争が始まってしまったので、東京市民との交流もなく、疎開や買出しの時代に入ってしまうので、野営場もいつの間にか使われなくなって荒れてしまった」とある。

これらから、当該施設は太平洋戦争中もしばらく使用していたと推定できる。空襲から逃れる学童疎開地等に使っていないのは、ハイキング需要に応える準備はあっても長期居住には向かない設備だったからだろう。この施設は戦後に再開したが、それは本稿とは別のことである。

（本稿末尾 図10. 1 鳶平市民野営場①・図10. 2 鳶平市民野営場② 参照）

## 11. 「19. 9. 23」付の登山記念スタンプがある絵葉書と心身鍛錬した英霊

前掲の「埼玉新聞」記事のように、昭和19年に至っても自粛を求めるほどに旅行者があった。

図11. 1・図11. 2・図11. 3は、武蔵野電車製作の絵葉書セットの一部で、「外事課検閲済」とあるように戦時中の印刷である。「外事課検閲済」ということは時局に不適切なものではないことを示している。その1枚「バンガローの朝」図11. 2に「19. 9. 23」付の伊豆ヶ岳登山記念スタンプ図11. 3が押してある。この数字が昭和19年9月23日であることは明らか。これは売店が営業していたことも示している。売店の営業が成り立つだけの人数がハイキングに来ており、そこで山を楽しんでいるとしか思えない絵柄の絵葉書が売られていた、ということになる。

資料掲載はしないが筆者所有の、「最新撮影（高級光沢焼付写真）伊豆ヶ岳 正丸峠の風景」の裏面には、「18. 11. 3」（あるいは「18. 11. 8」）付の伊豆ヶ岳登山記念スタンプが押してある。「頂上伊豆●屋売店」（●字不明）と併記があるので、売店が営業していたことが分かる。上記の前年とはいえ、売店営業は特殊な事例でないようだ。

伊豆ヶ岳登頂が登山かハイキングかは考え方によるが、「埼玉新聞」昭和20年7月7日に「郷土に生きる神鷲 第七回・柴崎茂大尉」があり、柴崎茂大尉が登山で錬成していたことを紹介している。該当を抜粋する。

「子の身を安ずる母親は『茂や山も結構だがお前のやうに年中山にばかり出かけて大丈夫か』と云えば『お母さん御心配はありません山登は心身の鍛錬です丈夫な体に鍛えて置かねば役にたち



ません。山は心身鍛錬の道場です計画しての登山は無謀な事は少も有りませんよ』と数年間の登山中一回の事故もなく予定の帰宅日には必ず帰って来て両親を喜ばせてみた。」

特攻隊員で出撃した英霊への配慮は当然としても、柴崎茂大尉が行っていた登山は心身鍛錬として終戦の1か月前の時点でも肯定して紙面に掲載している。新聞掲載は読者、つまり生きている人への周知である。それならば、「19.9.23」付の伊豆ヶ岳登山は、不要不急の旅行ではなく、心身鍛錬のためだということになる。

(本稿末尾 図11.1・図11.2・図11.3 参照)

## 12. どうとらえるのか

筆者は20歳前から地元飯能市にあった市民団体「戦争体験を語り継ぐ会」に参加して体験談を聞き、15年ほど前にも新たに体験談を収集した。戦時中の苦労や困難を聞いてきたその心象からは、ここにまとめた太平洋戦争中のハイキングや登山の人気は信じられない。ハイキングとか登山といった行為は都心に住む生活に余裕がある人たちの娯楽だったのかもしれない。地域による生活格差や意識格差が大きかったのだろうか。あるいは、日々の生活から離れようとする特別な行為だったのかもしれない。それとも、これまでの生活を維持しようとする庶民意識はなかなか変わらないのだ、とみるべきなのか。2023年にもウクライナの惨状が伝えられているが、普通の日常のように見える映像も同時に見ることができる。市民は通常であることを懸命に求めるのかも知れない。

山村博美『化粧の日本史 美意識の移りかわり』（吉川弘文館、2016年）の「戦時下の統制時代」の項に「化粧品は基本的に不要不急の品とみなされていた」として生産数量や広告量の減少を述べながらも、化粧の空白期間は「太平洋戦争の最後の二年」だとしている。化粧品でさえこれなのだから、身体づくりや国威発揚という理屈が成り立つ観光やハイキングは、戦時下でも維持できたということか。

いずれにしても私のなかに納得できないところがあるからこそ、本稿をまとめた。よって本稿は結論のようなものを示さずに終え、これらをどうとらえるかは読者に委ねたい。

最後に、昭和17年5月1日発行の『徒歩旅行』第5巻39号の表紙と掲載写真を紹介する。撮影地は、図12.1が豊島園、図12.2には西武電鉄沿線とあるので現在の西武新宿線周辺のどこかだ。昭和17年5月の戦況は勝った勝ったムードの時期とはいえ、ここに写されている姿は豊かで穏やかな生活である。

(本稿末尾 図12.1『徒歩旅行』5巻39号表紙・図12.2『徒歩旅行』5巻39号掲載写真 参照)

## 13. 関連著作等と地域の調査事例

- ・白幡洋三郎（1996）『旅行ノススメ』中公新書1305.
- ・坂倉登喜子・梅野淑子（1992）『日本女性登山史』大月書店.
- ・工藤泰子（2011）「戦時下の観光」『京都光華女子大学研究紀要』第49号.

- ・上田卓彌（2013）「戦時下における旅行制限とガイドブックについて」『星稜論苑』第41号.
- ・大宮高史「戦中日本の「旅行制限」メディアは国民に「自粛」を迫った」J-CASTニュース編集部、2020年06月28日11時00分公開  
(<https://www.j-cast.com/2020/06/28388869.html?p=all>) (2022年9月25日).
- ・『『写真週報』にみる昭和の世相』 『写真週報』にみる庶民生活 4. 鉄道事情、国立公文書館アジア歴史資料センター  
([https://www.jacar.go.jp/shuhou/topics/topics03\\_04.html](https://www.jacar.go.jp/shuhou/topics/topics03_04.html)) (2022年9月25日).
- ・埼玉県比企郡嵐山町「嵐山町web博物館」第6巻【近世・近代・現代編】 - 第3章：産業・観光 第1節：景勝・名所「武蔵嵐山（嵐山溪谷）」  
([http://www.ranhaku.com/web06/03sangyo\\_kanko/01msr04.html](http://www.ranhaku.com/web06/03sangyo_kanko/01msr04.html)) (2022年9月25日).
- ・下関市烏山民俗資料館2019年度企画展「近代的徒歩旅行」  
(<https://www.karasuyama-museum.jp/6327.html>) (2022年9月25日).
- ・箱根温泉旅館ホテル協同組合公式ホームページ「はこピタ」オンライン百科事典「箱ペディア」【日中戦争前後】、投稿日：2011年6月15日  
(<https://www.hakone-ryokan.or.jp/hakopedia/?p=589>) (2022年9月25日).



図 3.1 『徒歩旅行』 5巻39号  
表3と対向頁の広告



図 7.1 『むしあぶみ』第27号



図 8.1



図 8.2



図 8.3



図 8.4

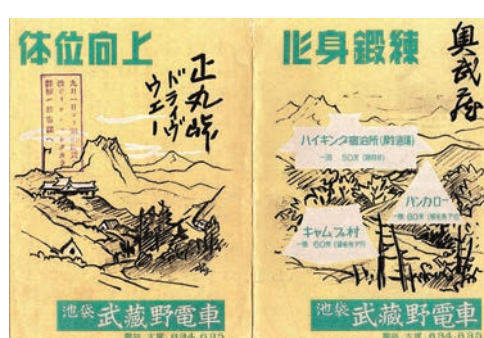


図 8.5





図8.6

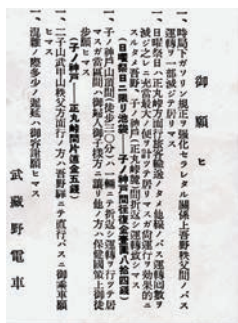


図8.7



図9.1 子ノ権現 高盛飯とクーポン式遊覧券



図10.1 鷹平市市民野営場①



図10.2 鷹平市民野営場②

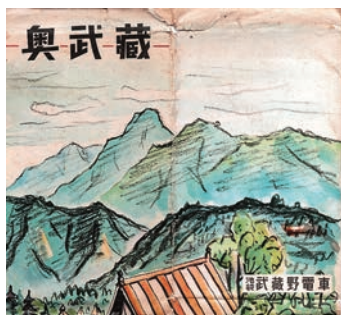


図11.1



図11.2



図11.3



図12.1 『徒歩旅行』  
5巻39号表紙



図12.2 『徒歩旅行』  
5巻39号掲載写真